

元の「ヤンキー」(モトヤン)が、注目されている。ちょっとワルだったが、流されずに「復元」して生きる姿が好感を呼んでいるようだ。閉塞感から抜け出そうともが今の社会が、パワーを必要としているためだろうか。
(山畑 洋二)

嫌がられても
誇りを持って

「今の社会は、みな周りに
気遣い、言いたいことも自分
の中に封じ込めている。あつ
けられんと自分をさらけ出す
ヤンキーの生き方が見直され
てるとなると思う」と大阪市で
人材育成会社を営む笹岡郁子
さん(38)。

高知県須崎市で過ごした十
代は荒れていた、という。足
首までのロング・スカート
に、丈を短くしたジャケット
の、変型制服で高校へ。脱
色した髪は「わがわが」だ。
背骨の曲がる病気で自暴自
棄になり、ヤンキーに。仲間
と深夜、高知市のはりまや橋
周辺で友人の車に乗車。危険



「あのころ、先のことをあれこれ考え
もしなかった」と話す伊勢田さん(大
阪・心斎橋の美容室「ライカレ」で)

元ヤンキー 自分流に生きる



「十代の経験が今も生きてます」。講演のたびにそう話す
笹岡郁子さん(大阪府中央区のノモ・ソリューションで)

今や会社や美容室経営

と隣り合わせの遊びもした。
目立つことが優先したとい
う。

二十歳を過ぎ「いつまでも
続けられない」と大阪に出た
だが、「社会は学校より手ご
わかった。以前は何にいきが
っていったんだろう」と思うこ
とも。化粧品販売会社などに
勤めつつ、「負けたくなかつ
た」。一昨年に独立。「嫌が
られても自分を信じ、誇りが
あった。長いものに巻かれな
いという考え方はビジネス社
会でも大切ですよ」と話す。

「復元」パワーが魅力?

語源は「髪を脱色し、米国人を
連想させた」「大阪・アメリカ村
周辺に多くいた」「やんちゃだか
ら」など諸説ある。

ヤンキー人気の火付け役と
なったのは、北海道・北見学
園余市高校教員の義家弘介さ
ん。昨春にテレビドキュメン
タリー番組「ヤンキー母校に
帰る」で、ヤンキー体験を踏
まえて母校で教え子たちと向
き合う姿が紹介され、共感を
呼び、一気に「ヤンキー」が
標準語になった。

伊勢田さんは十四歳の時、
バイクの無免許運転で大けが
をした。「他人に危害を加え
ること以外、ほとんどした」
と補歴も隠さない。「毎日
が勝負。負けたら終わりと思
っていた」

ヤンキー「キー」を強く
発音する。関西発の呼び名と
され、関東の「ツッパリ」ととも
に1970年代後半に社会現象に。

悪ぶっているけど 「情」兼ね備えた印象



月刊「少年
育成」編集長
の澤浦武雄さ
んの話「『ヤ
ンキー』とい
う言葉は本当

のワルではなく、悪ぶって
いるけど、人の情やダンテ
イズムも兼ねた印象があ
る。価値観の多様性を認め、
広く受け入れようとする現
在の風潮が、当時の若者の
衝動を理解する方向に進ん
でいるのでは」

毎日勝負
負けたら終わり

大阪・アメリカ村などで美
容室四店を経営するヘアア
ーティスト伊勢田郁さん(43)も
モトヤン。「今の世の中、や
つてはダメなことが多すぎ
る。ちょっとばかりはみ出し
た方がかっこよく見えるんじ
やないかな」と見守る。

「ム」疾走ヤンキー魂。携
帯電話のEZWebでのサ
イト「ヤンキー夜露死苦」
などが次々に登場し、「ヤン
キー」の根性やファッショ
ンを見てみようとする雰囲気も
出てきた。